# 幸福実現党が１００％大勝利する政治提言【上巻】

2021.5.19【第1版】

**はじめに**

　「１００％大勝利する提言」というタイトルからも分かりますように、この文書は、『幸福実現党』が大勝利するために大切な内容です。よって全部でＡ４用紙４０ページ以上ありますが、しかし書いた私自身は「長い」とは少しも考えておりません。なぜなら日本を守り、地球を守る上でも、そして久遠実状の仏陀にして、大救世主の御降臨を伝える上でも、本書はとても重要な内容であると自負しているからです。

　ですから『幸福実現党』を大勝利させたい方で、なおかつお時間ある方は、ぜひお付き合いください。

　なお、【上・中・下】の三部から成り立っており、【上巻】は７ページで、これは僧団の「組織文化」に対する提言、【中巻】の７ページは「資本主義の闇」に関する提言、そして【下巻】が本題の政治提言です。

# カルトの烙印を剥がすために

　今現在、中国共産党が北海道の土地を静岡県以上にも及ぶ、膨大な土地を買い占めていることから、「数年後には北海道は中国の領土になるのでは？」とまで言われております。しかし日本の政権に『公明党』が深く入り込んでいるために、我が国では、外国人が日本の土地を購入することを規制できません。しかもコロナ禍でデフレ不況が深刻化しているというのに、『ＲＣＥＰ』が国会で承認され、今後ますます農業をはじめ日本のあらゆる産業が、中共によって破壊されていこうとしております。

　そうした危機的状況下において、『幸福実現党』の地方議員が４０数名誕生し、躍進していると言っても、『公明党』の地方議員は２７００名を超えて、その差は約３０倍です。さらに『公明党』は、都議会定数１２７人のうち、２３人も議員を持っているために、都議会に対してもかなり大きな力を持っております。一方で『幸福実現党』の都議会議員の数は「０人」ですから、都議会において『幸福実現党』と『公明党』の勢力の差は、測定することさえできません。そうであるにもかかわらず、２０２１年の夏に行われる都議選にも、『幸福実現党』は出馬予定の候補者もおらず、残念ながらそれは、今のところ国政においても同様です。

　しかし実際には、両党の支持母体である『幸福の科学』と『創価学会』の勢力差は、そこまではありません。私は「すでに『幸福の科学』のほうが『創価学会』よりも大きい」と考えておりますが、仮に『創価学会』のほうが大きかったとしても、その差は「１．２～１．３倍程度」のもので、「３０倍」ということは絶対にありえません。よって「『幸福実現党』の地方議員が４０人以上誕生した」と言っても、それは本当に躍進と言えるかどうか、これは疑問が残ります。なぜなら『幸福の科学』と『創価学会』の規模を比べれば、「地方議員が千人いたとしても少ない」ということが言えるからです。

　以上のことから、日本と『幸福実現党』の流れを、どうしても変えなければなりません。

　だからこそ、、、“幸福実現党が１００％大勝利する政治提言”として１１個の提言をさせていただきます。これは“政策”と“戦略”に対する僧団への提言です。

　なぜ１１個もの提言を、政党に対してではなく、僧団に対して行うのか、それはそれだけの内容をお伝えしなければ、日本は滅んでしまうと私は考えているからであり、また【上巻】の７ぺージお読みになればお分かりになりますが、これはあくまでも政党という一つ部署の問題ではなく、僧団全体の問題と捉えているらです。

　私が属する広報局にも大きな責任があり、ゆえにもちろん私にも責任がございますが、当会は未だに「カルト」扱いされることがあります。その「カルト」のレッテルが伝道を妨げ、国政選挙における勝利を妨げていることは、まず間違いありません。むしろ逆に、このレッテルさえ無くなれば、伝道がスムーズに進み、様々な事業もより発展します。やはり現在の当会の問題点は、「日本国民による当会に対するカルトの烙印」です。

　そして現在只今、日本国中で行われている様々な活動も、この「カルトの烙印」を剥がすにあたり、とても大切ではあることは承知しております。しかしこの「カルトの烙印」を直接的に剥がし、大伝道を推し進める道が、「第二の広報」と言われる『幸福実現党』にはあります。なぜなら日本国民の“常識”や“既成概念”を破壊するだけのことが、実はすでに日本ではたくさん起きているからであり、そしてそれはまぎれもなく“政治上の問題”だからです。

　ですから本提言を読まれれば、おそらくこれまでの“規制概念”や“常識”が音を立てて崩れていくことでしょう。“規制概念”ということに関して、「唯物論」や「無神論」ということではありますが、先生は『神理学要論』の中で次のように説かれておられます。

**『神理学要論』**

　 この知の世界においてまさしく大事であることは、既成の概念、正しいといわれていること、真実のものであると思われていることが本当のものであるのかどうかと、ということです。

　政治の世界において、「真実だと思われていること」、「正しいと言われていること」がありますが、そうした“日本の規制概念”を破壊し、“日本の常識”を破壊することはたしかにできます。“日本の常識”を破壊する、それは「日本を創造的に破壊する」ということでもありますが、その内容をこれからご紹介いたします。

　神仏の存在を疑うことは問題ですが、しかし世の常識は、一度疑ってみる必要があるわけです。

# 提言が受け入れられなかった理由

　私も心未熟な修行者の一人であり、ゆえにまだまだ心の修行に励んでまいります。あくまでもこれを前提にお話ししたいと思います。

　実はこれまで私は、十回くらいにおよぶ政治提言を、『幸福実現党』に対して行ってまいりました。

　それらの提言は、一応は政調会などで吟味されてはいるものの、しかし政策や戦略として受け入れられたことは一度もなく、いつも返答は、「政党が国政に乗り出し、規模相応の勢力を確保してから」、あるいは「先生が言われていないから」というものでした。

　しかし「規模相応の勢力を確保してから」という返答には、大きな疑問が残ります。なぜなら『幸福実現党』は国会議員が一人もいない段階で、大統領制まで組み込んだ「憲法試案」まで公表し、無神論と唯物論が蔓延るこの日本において、「自由・民主・信仰」を前面に主張して、「新しい国造り」まで謳っているからです。

　もちろん政策として表に出していくには、慎重さも大切です。特に今回、私が提言している「医療の問題」は、かなりの慎重さが必要です。しかし後ほど紹介する「遺伝子組み換え食品の問題」や「水道民営化の問題」などは、すでに他の小さな政党でも述べていることであり、国会議員を持たない『幸福実現党』でも、今日からにでも出来る政策です。

　ですから私が提言を行っても、政党に受け入れていただけなかったその理由として、以下の三つのことが考えられます。それは「訓詁学」、「常識外れ」、「組織文化」です。この【上巻】では、そのことについて述べさせて頂きます。

理由①「訓詁学」

　大変、失礼にあたりますが、それを承知の上で、勇気をもって言わせていただくならば、私が行ってきた、これまでの十回くらいにおよぶ政治提言が、『幸福実現党』に聞き入れてもらえなかった理由の一つに、「訓詁学的に政治を考えている」ということがありました。

　たとえば「遺伝子組み換え食品」について、霊言の中で豊受大神は問題視されておりますが、先生はこの問題について、明確にお説きになられたことはありません。そのために私がこの「遺伝子組み換え食品の問題」を政党に提言しても、「先生が言われたわけではなく、霊人の意見だから」と返答されたことがありました。

　ご存じのように、かつてユダヤ教の律法学者たちは、「モーセの教えに間違い無し。モーセは『日曜日を安息日とせよ。一週を七日に定め、日曜日は休みなさい。その日に働いてはならん』と言われた」と訓詁学に陥っていました。しかしモーセが「安息日に休め」と述べたその真の意味は、「一週に一日を休みとせよ。その日を聖なる日とせよ。その日をホリデーとせよ。ホーリーデイ（holy-day）にせよ」という意味でありました。これと同じように、、「先生はあの時、ああ言われた。こう言われた。先生はそういった話はされたことがない」と、まさに訓詁学的な解釈に陥っております。

　もちろん政党の中にも様々な方がおられ、「先生が明確に言われていないことでも、政策に取り入れるべきである」と考える方もおられれば、その一方で、たとえ政党の方ではない方であっても、「先生が言われたわけではないならば、政策にするべきではない」という意見を持っている方もおられます。そして『幸福実現党』の最終的な結論として、「先生が明確にお話されない政策は取り入れない」というものになりました。

　しかし『永遠の生命の世界』というご説法の中で、先生は私たちに次のように教えてくださっておられます。

**『永遠の生命の世界』【6刷】／第５章　永遠の生命の世界／３　真実の価値観に基づいた仏国土を**

　私の願いは一つです。真実の価値観に基づいた仏国土を、この世において成就すること、そして、その仏国土が、永遠の生命に永遠の進化を約束するものであること、それを願っています。

　どうか、一人でも多くの人に、永遠の生命の世界について語ってください。

　つまり仏の願いは「真理に基づいた仏国土が建設されていくことであり、そしてその仏国土とは、永遠の生命を持っている生きとし生けるものが、永遠に魂を進化させることができる社会」なわけです。逆を返せば生きとし生ける者が永遠に魂を進化させられる理想社会であるならば、どんな政策を打ち出しても問題がないことになります。

　また、『幸福の科学興国論』にはこうあります。

**『幸福の科学興国論』**

「知の原理」を一つ入れることによって、知識社会に対して開放系の体系を組んでいるということが、幸福の科学の強みだと思います。この「知の原理」のなかには、もちろん、あの世の霊界知識もありますが、それだけではなく、この世的な知識の面も含んでいます。さらに、その知識を使うための知識、つまり智慧としての面も持っています。

　この「知の原理」を宗教のなかに入れるということは、非常に勇気の要ることなのです。というのは、他の宗教では、これを入れると教義体系が崩れてしまうからです。そこで、疑わせないようにします。要するに、新しい知識などから攻撃を受けないようにするために、金科玉条のごとく、「これのみが正しい」と言って、ほかのことを考えさせないように洗脳していくのです。これが邪教、あるいは実力以上に大きくなった教団の特徴です。

　ですから、「知の原理」を入れたということは、宗教としては、かなり革命的なことですし、幸福の科学が、時代の変化とともに、「」（）、ことを意味しているのです。ですから、だと思います。

　このように『幸福の科学』の教えは、まさに“国を興す教え”であり、その教えの中には「知の原理」が入っており、そしてその“知”は、もちろん、あるいは情報も含んでおります。そして源頼朝も霊言の中で次のように述べておられます。

**『源頼朝はなぜ運命を逆転できたのか』**

源頼朝　イランで言うと、最高宗教指導者が上にいて、その下に宗教者の大統領がいるわけよね。

　だから、（大川隆法総裁の）弟子たちは政党をつくってるけどさ、政策から何から全部、総裁がつくってくれるもんだと思うとるし、世間は、「本当に政治をやりたいんだったら、大川隆法がやればいいんじゃないか」というふうに思っとるけども、だから負け続けとるんよ、ずっと。

　だからね？釈党首、まあ、党首が続くんかどうか知らんけどもさ、やっぱり、ロウハニ師が大統領、実務のところをやれなきゃいけないわけで。

　大川総裁は、ハメネイ師の（ように）宗教的な精神が政治の上に載っている、まあ、日本的に言や、地上に降りたる天照大神かもしれないし、天御祖神かもしれないし、よくは分からんけども、そうした宗教的な精神を体現した存在であるんでね。

武田　はい。

源頼朝　だから、「大川師が政策を出して、大川師が言論でもって敵を倒して、票を集めて、大川師が講演して、大川師が街宣して、そして、勝てたらいいんだ」っていう、そういう甘えがあると思うんだよ。この隙のところを狙われているんだ。

　「弟子たちが頑張らなきゃ駄目なんだ」っていうことを知らなきゃいけない。

　このように源頼朝も「先生に頼り切ってはいけない」、「政策は弟子たちで考えるべきである」といった趣旨のことを述べておられます。

　さらに『経営戦略の転換点』で先生は、「情報に対する鋭敏さが大切である」ということも教えてくださっております。あるいは「幕末の志士たちは、マスコミ的な仕事をすることで明治維新は起きた」ということも教えてくださっております。

　ですから私たち仏弟子は、情報に対して鋭敏に対応し、そして“時代に適合した政策”というものを、積極的に考えなければなりません。言葉を変えれば、唯物論国家とか、無神論国家とか、人々が自助努力を忘れた堕落した国家とか、国民が大きな政府に依存しようとする国家か、そんな真理に反した国家を我々は築いてはなりませんが、しかし真理が打ち立てられ、国民の魂の向上が永遠に約束され、全員が幸福になれる自助努力の国家へと向かうのであるならば、如何なる政策であってでも取り入れるべきではないでしょうか？

　そして日本の直弟子である我々が、主の教えに基づいた政策を自分たちで導き出していくからこそ、やがてアラブやヨーロッパ、アフリカといった他の国々においても、あるいは千年後、二千年後といった後世においても、『幸福実現党』は、“”を、悟りの力によって自分たちで導き出していくことができるのではないでしょうか。

　そしてそういった「組織文化を遺す」ということも、我々日本の直弟子にはあるのではないでしょうか。

　もちろん私も一人の出家者として、「絶対帰依の精神」が大切であり、永遠の真理に対して先生が言われていないことを語り、法を曲げるようなことになれば、それは大きな罪となることは重々分かっております。たとえば「人は悟りを得たら、たとえ過ちを犯しても罪にはならず、因果の理法の制約を受けない、不落因果である」などと法をねじ曲げたことを説けば、それは仏弟子として大きな罪になることは十分に分かっております。

　ですから永遠の真理については、「絶対帰依の精神」でもって、何も自分の頭で判断することなく、純粋にただ主についていくことが大事であることも分かっております。

　しかしたとえ先生が明確に言われていないことであっても、人々を幸福に誘うであるならば、智慧の力で積極的に政策に取り入れていくことは、むしろ仏法真理に叶ったことであると言えるでしょう。それともいつか『幸福実現党』から国会議員を輩出して、そして誰かから陳情を受け入れても、「先生が言われていないから～」とその陳情を簡単に拒否してしまうことが、本当に真理に叶っていることなのでしょうか。

　仏弟子とは判断することなく先生の教えについていきながらも、しかしこの世の問題については、教えて頂いた真理に基づき、智慧を駆使して、次々に自分たちで判断をくだして、仏国土を築いていくべきなのではないでしょうか。

　すなわち宗教において、弟子は「法の創造」ということを行ってはなりませんが、しかし政治において、弟子は「政策の創造」ということは、智慧の力によって積極的に行っていくべきなのではないでしょうか。それこそが創造主であられる仏の子である、我ら仏弟子に求められている創造性でもあるのではないでしょうか？

　それとも創造主の子である我らには、何らの創造性も不必要なのでしょうか？

　ここには、政治における「」があるのかもしれません。雛が卵から孵る際、内側から卵の殻を突く時と、親鳥が卵の外側から殻をついばむ時は同じでなければならないように、魂の親である仏や天上界よりご助力は頂きますが、しかしあくまでも卵の殻を内側から破るのは、我々弟子の自助努力でなければなりません。すなわち我々仏弟子というのは、仏の助力をいただきながらも、餌をもらい続けて飛べなくなる野ガモになることなく、自分たちの力でもって殻を破って、仏に向かって羽ばたかなければならないのではないでしょうか。

　つまり「わが説く言葉の上に未来は築かれる」、「判断しなくて結構です。ついてきてください」という主のお言葉の本質を、今こそ我々直弟子は、適格に見抜かなければならないのではないでしょうか。

　なぜなら地上に生きる人間が営為努力して、悟りの力でもって自分たちで政策を考えて、天上界や仏に全託するのと、地上人が政策から戦略から、何から何まで全部、天上界と仏に依存するのとでは明らかに意味が異なり、後者は明らかに中道を逸脱していると思えるからです。

　すなわち我々仏弟子には、「永遠の仏陀と共に仏国土ユートピアを築く」という使命でありますが、しかしその仏弟子の政治的な使命の中には、「弟子が一致団結して、知識や情報を集結させ、そして悟りの力でもって、この世をユートピアにする政策を自分たちで考える」というものもあるのではないでしょうか。

　大変失礼を承知な上で、あえて勇気をもって「訓詁学」ということについて述べさせていただきましたが、しかしこれは仕方がないことでもあると私は考えます。なぜならこうした「訓詁学的な考え方」は、２００９年に『幸福実現党』が立党されて、政治に乗り出したがゆえの、「」と言えるからです。もしも仮に、『幸福の科学』が政治に乗り出さず、宗教一本でやっていけば、“政策”といったこの世的な知識や情報を下から提言する必要はありません。また宗教とは無関係な政党であれば、「先生が言われていないから」という返答にもなりません。

　ですからやはり「先生が言われていないから政策に取り入れるべきではない」という、現在の僧団の政治に対する訓詁学的な考え方は、宗教が政治に乗り出したために、起こるべくして起きた問題と言えるでしょう。それゆえに誰のことも責めることはできず、またこれは僧団全体の問題と言えるでしょう。

理由②「常識外れ」

　私が『幸福実現党』に提言しても、「先生が言われていないから」と、その提言が聞き入れられなかったそのの一つに、「提言の内容があまりのも常識外れであり、そのために真剣に吟味されてこなかった」ということがあります。

　すでに述べましたように、私が行う政治提言は、その内容を知れば知るほど常識がひっくり返り、まさに日本を破壊する内容です。

　これを『幸福実現党』の党員の方に分かり易く説明するならば、グレタさんやＮＨＫが主張する「地球温暖化」が嘘であり、地球規模の詐欺であるように、実は私たちは、すでに他にもいろいろなところで詐欺被害に遭い、騙されてきたのです。そして私たちはこうしている今現在も、間接的に盗まれ、殺されてもいます。こうした信じがたい内容であるがゆえに、なかなか聞き入れられなかったわけです。ですから仕方がないと言えば、仕方がありません。

　ただし内容をきちんと吟味してみると、先生の教えから反れているものではなく、むしろ先生の教えに則ったものであることが分かります。私自身、「先生の教えから反れていない」という確信があるからこそ、こうした提言を行っているわけであり、またすでに多くの信者さんから、「与国が言っていることは先生が言っていることと反れていない」と言われてきました。

　しかし実は私自身、こうした“”に気がついた時、「自分は職員として、こういった内容の発信はするべきではないのではないか」と、そんな考えに陥ったこともありました。たとえばかつてエドガー・ケイシ―が、キリスト教には存在しない「リンカ―・ネイション（転生輪廻）」の教えに出会った時、彼は「自分の中に悪魔が入り込んだのでは？」と、そんな不安に襲われたそうです。しかし敬虔な彼は、『聖書』を今一度、真剣に学び直してみると、「イエスは生まれ変わりを否定しない、むしろイエスは生まれ変わりを肯定している」という結論に辿り着きました。

　これと同様に、私も“”に気がついた時、「自分は間違っているのではな？」、「悪魔に魅入られたのではないか？」と考えて、そして先生の教えを学び直してみました。すると実は先生はご説法の端々に、まるでヒントでも残すかのように、“”について語っておられたことに、私は気がついたのです。

　そして私が辿り着いた結論は、エドガー・ケイシ―と同じく、「先生は“”について否定されていない。むしろ肯定されている」というものでした。

　このことについては、【中巻】、【下巻】を含めて本提言を最後まで読まれれば、かならずご理解いただけるはずです。

理由③「組織文化」

　これまで１０回ほどの提言を行ってきても、一度も聞き入れてもらえなかった三番目の最後の理由として、私が予測するには「組織文化」にあると思われます。

　総裁先生は「組織文化」について、『凡事徹底と成功への道』の中で次のように仰られておられます。

**『凡事徹底と成功への道』**

　幸福の科学を始めてから、私が組織文化をつくっているつもりでいたのですが、現実はそうなってはいませんでした。実際には、転職で入った人がいろいろなところの“企業の文化”を持ち寄ってやっていたわけです。

　そのなかでも、最悪なのは、たいへん失礼に当たるかもしれませんが、いわゆる役所のレベルでしょう。おそらく、組織としては、町役場のレベルのようなものがいちばん下で、生産性が最も低いと思います。

　これよりもややましなものとしては、「親方日の丸型」の企業経営をしているところでしょう。国営企業に近いような、絶対に潰れない楽な感じの考えのところもあります。

　なかには、「経営危機があれば、どんなことでもやる」というようなベンチャー気質を持っている人もいますが、全体としては、大きくなるにつれて、だんだん凡庸化しているとは思います。

『凡事徹底と成功への道』／第2章　質疑応答／Ｑ2　組織全体に「凡事徹底」を文化として定着させるためには／「こちら側の事情」が中心の組織になっていないか … page.113

　以上の先生のお言葉からも、当会の現在の「組織文化」は、明らかに主がお創りになられたものではなく、何としてでもイノベーションして破壊し、新たな「組織文化」を創造しなければならないことは明白です。

　そして日本の組織文化では、なかなか考えられないことですが、アメリカなどでは社内のエレベーターなどで、部署を超えて上司と部下がフランクに話し合い、時には提案したりもするそうです。これも御法話の中で、先生から教えて頂いたことですが、アメリカでは「エレベーターピッチ」と言って、エレベーターに乗っているわずか１５秒の間に、部下が上司に対して「ボトムアップ」の勝負をかけることがあるそうです。

　では、『幸福の科学』総合本分のエレベーターが「エレベーターピッチ」の場となり、「ボトムアップ」のチャンスの時間になっているかと言えば、やはり疑問が残ります。これはあくまでも私の個人的見解ですが、現在の当会の組織文化に、そのようなアメリカ的文化があるとは、とても感じられません。

　しかし『フランクリースピーキング』という書籍にもありますように、先生は真面目かつ、とてもフランクな方でもありますから、我々仏弟子も、どこかに日本人の持つ生真面目な組織文化と共に、「エレベーターピッチ」がまかり通るアメリカ的なフランクな組織文化を、作っていかねばならないのではないでしょうか。

　そして「当会の現在の破壊すべき組織文化」として、下からのに対しては、その提言が成す可能性や効果をあまり考慮せずに退ける、ということをこれまで何度も、私は目の当たりにしてきました。

　これが私の“常識外れの提言”が、ただの一度も真剣に吟味されてこなかった理由の一つでもあると思います。

　それは『大悟の法』にもありますように、禅宗の六祖慧能が「南方人だから悟れない」とレッテルを貼られていたことが思い出されます。

　先生は『悟りの原理』という教えの中で、空海が日本から中国に渡り、何千人もの弟子が何十年と修行を続けている中で、わずか数カ月足らずで、恵果和尚から密教の継承権を譲られて帰ってくる話をされて、私たち仏弟子に“宗教特有の厳しさ”というものを教えて下さいました。表現を変えれば、先生は恵果和尚と空海の継承のやり取りから、「宗教のあるべき組織文化の姿」を私たちに教えてくださいました。

　しかし先ほどご紹介した『凡事徹底と成功への道』にもありますように、現在の僧団には残念ながらこのような「宗教的組織文化」は無く、むしろ転職で入ってこられた方々が、いろいろな“企業の文化”を持ち寄ったことによって、明らかに「違った組織文化」が出来上がってしまいました。

　空海が今の当会の組織文化の中で出家されたら、先生に過去リーディングされない限り、空海として活躍することは難しく、しかし先生は約百年ほどしか地上にはおられませんが、当会は約三千年と続いていきますから、直弟子がこの「組織文化」に対して、イノベーションを起こさなければならないことは歴然です。現在の「組織文化」をのように固めてしまって、次の世代に受け継がせてはならないのは歴然です。

　しかし私はこれもこれで、ことであると考えております。なぜなら人生計画として、「先生よりも先にお生まれになられて、あるいは先生と同年代にお生まれになられて、様々な人生経験をされて、お仕事をされて、そして出家されて先生を支える」、という偉大な人生計画を建てられた仏弟子がいたからこそ、今の『幸福の科学』があることは間違いないからです。ですから私も、先生と天上界に感謝すると共に、先輩弟子たちに対して感謝しても感謝し切れません。

　しかしながらその弊害として、やはり他の企業組織から、組織文化が輸入されてしまったことも明白な事実です。そしてその結果、「エレベーターピッチ」が行われにくく、下からの提言もしづらいのも事実であると思います。さらにその結果、先輩がたよりも後から出家し、役職も低く、年齢も若く、学歴も無い私のような人間のは、なかなか真剣に聞いてもらえない、ということがあったのかもしれません。

　そしてそれは、もしかしたら「南方人は悟れない」という考えにも似たなのかもしれません。つまり下からは提言しづらいと共に、上の諸先輩方は下の者に対して先入観を持ってる、そういった破壊すべき組織文化があるのではないでしょうか。

# 三つの理由の三つの原因

　以上のように、私の政治提言が一度も聞き入れられなかった理由として、「訓詁学」、「常識外れ」、「組織文化」といった三つ理由を述べさせていただきました。これらが悪しき相乗効果を成すことによって、私がこれまで十回ほど行ってきた政治提言は、ただの一度も受け入れられなかったようです。

　しかしすでに述べましたように、「訓詁学」は「宗教が政治に乗り出しため」という原因があり、「常識外れ」は「信じがたい内容である」という原因があり、「組織文化」は「先生より先に、あるいは同年代にお生まれたための弊害である　」という原因があるように思われます。つまり三つの理由には、それぞれ三つの仕方がない原因があるようです。

　さて、前置きが長くなりましたが、これらを踏まえまして、「幸福実現党が１００％大勝利する政治提言」の【中巻】と【下巻】を、ぜひ読み進めていただければ幸いであります。

幸福の科学　与国秀行